

埼玉学園大学・川口短期大学 機関リポジトリ

Results of Utilization of the Specialty of Teachers in Seminar on Nursery and Teaching Practice

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-02-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 井上, 清美, 笠井, かほる, 大橋, 修一, 加藤, 邦子, 木谷, 安憲, 小川, 房子, 丹羽, 健太郎 メールアドレス: 所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/497

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



保育・教職実践演習における 「教員の専門性」を活かした授業展開

井上 清美・笠井かほる・大橋 修一
加藤 邦子・木谷 安憲・小川 房子
丹羽健太郎

1. はじめに

本学では平成 25 年度から「保育・教職実践演習」の授業を実施している。文部科学省教育審議会答申「今後の教育養成・免許制度の在り方について」にあげられた科目の目的は以下の 4 つである。

- ① 使命感や責任感，教育的愛情等に関する事項
- ② 社会性や対人関係能力に関する事項
- ③ 幼児児童生徒理解や学級経営に関する事項
- ④ 教科・保育内容等の指導力に関する事項

中央教育審議会が「教職実践演習」の導入を提言したのは平成 18 年度のことであり，この授業に関する先行研究の蓄積は少ないものの，教職実践演習（幼稚園）を対象とした研究には以下のものがあげられる。第一に，授業の全体を通して学生の意識や自己評価がどのように変化したかに着目した研究が行われてきた（平尾，2015；一色，2014）。第二に，授業の形態に焦点をあて，グループ討議と実習の振り返りを関連づけた研究（飯塚，2012）や協同学習の効果を示した研究（山田他，2016）なども展開されている。第三に，子育て支援センターや子育て支援教室での実習（勝間田，2015）や付属幼稚園における実習（山田他，2014）を導入した取り組みもみられる。このように，現在までに行われてきた研究は，授業の展開方法やカリキュラム例を示すことが目的となっているものが多く，保育者の養成校としてどのような授業内容が望ましいのかは，未だ試行錯誤の段階であるといえよう（三好他，2015）。

本学の「保育・教職実践演習」では，先にあげた 4 つの視点にもとづき，保育者，教育者として必要な資質能力を獲得し，2 年間の学びをふまえた上での最終的な学習成果を達成するため，

担当教員の専門性を最大限に活かした授業内容を展開してきた。本稿では、平成 27 年度に開講した授業内容を示しながら、その成果について考察していきたい。

2. 授業内容および履修カルテ

1) 授業の構成

本学では、1 年次より 15 人単位のクラス制を設けている。保育・教職実践演習ではそれを継承し、2 つのクラスを合わせた 6 クラスを設定し、各クラスに担当教員を配置して授業を展開した。授業開始時にはすでにある程度の人間関係が形成されており、グループワーク等の作業も円滑に進められたものと推測される。授業計画は表 1 に示す通りである。前半では外部講師による講義を実施し、後半は各担当教員がオムニバス形式で授業を担当し、最終回はクラス別に成果発表会を行った。

表 1 授業計画

授業回数	形 態	内 容
1	全 体	ガイダンス 保育・教職実践演習について 学修評価表について
2	全 体	講義『みなさんを待つ社会——心の準備のきっかけに』（社会人としての心構え）
3	全 体	講義『社会人 2 年目を迎えた今と後輩へのメッセージ』（先輩から学ぶ）
4	全 体	演習『あそび歌を遊ぶ』（あそび歌）
5	全 体	講義『保育者に求められる危機管理』（危機管理）
6	クラス	演習（教員別テーマ）
7	クラス	演習（教員別テーマ）
8	クラス	演習（教員別テーマ）
9	クラス	演習（教員別テーマ）
10	全 体	演習『保育者・教師の倫理観——情報モラル——』（保育者・教師の倫理観）
11	クラス	演習（教員別テーマ）
12	クラス	演習（教員別テーマ）
13	全 体	講義『スムーズな保幼小の連携に向けて』（保幼小連携）
14	クラス	演習 (2 年間の振り返り)
15	合同クラス	成果発表

2) 履修カルテ

本学の保育・教職実践演習における特長の一つは、学生の視点にもとづいて作成された「履修カルテ」にある。「かわたんシート」という通称を使用し、一人ひとりの学生に親しみを持たせながら、これまでの学習成果について自己評価をした。

まず、小学校教諭免許、幼稚園教諭免許、保育士資格それぞれの必修単位をマッピングし、2年間で履修する科目の位置づけを再確認した。次に、自らが履修した全科目について、学習した内容を記入していく。その際、履修した科目の成績表を参照しながら、客観的評価と自己評価の比較を行った。

自己評価シートは「2年間の学びの中で、保育者として必要な資質能力が身についたか」を問うもので、①保育・教育への情熱、②社会性や人間関係、③子どもに対する理解、④保育内容等の指導力、⑤上記をふまえた今後の課題、の5つの点にわたって、入学時と履修時を比較しながら学習の成果を評価するものである。

3. クラス別の授業内容

次に、担当教員がクラス別の授業において、どのような内容の授業を行ったかを詳細に見ていこう。

1) 保育に使える様々な楽器の演習

保育・教職実践演習の目的の一つである「不足している知識や技能を補い、その定着を図る」という意味からは、ピアノ伴奏法と歌唱中心であった音楽の授業で指導できなかった、様々な楽器の演習をテーマにした。障害児に音楽療法として使用される楽器、保育に利用できる民族楽器、効果音として使われる楽器など、幼稚園、保育園での活動に応用できる楽器の紹介と、その奏法の実践、さらにカール・オルフの即興技法を使ったわらべうたを中心とするアンサンブルの演習を行った。

- ・楽器の名前と奏法の紹介（音の高低が出る旋律楽器、打楽器、効果音の楽器、民族楽器、音楽療法で使われる楽器、電子楽器など41種・表2）
- ・チェックリスト配布（表2）各自で自由に音出しをし、音色や奏法などの感想を記入する
- ・日本独自の遊び歌であり、動きを伴う「わらべうた」は保育でのこどもたちとの音楽表現にも適し、5音音階で出来ているため、アンサンブルの教材としても合わせやすい。また音域が狭く、少ない音での構成で口ずさみやすく、日本の伝統をこどもたちに伝承したいことか

表2 授業で使用した楽器およびわらべ歌の一覧

●さまざまな楽器にふれよう

		楽器名	音だしチェック	音・奏法・感想
1	旋律楽器	木琴		
2		メタロホン(鉄琴)		
3		ブームワッカー		
4		ミュージックペル		
5		音積み木(トーンボックス)		
6		トーンチャイム		
7		和楽		
8		Qコード		
9		動物音楽隊パペット		
10	効果音	オーシャンドラム		
11		スライドホイッスル		
12		パードコール		
13		レインスティック		
14		パーチャイム(ウィンドベル)		
15		スプリングドラム		
16	打楽器	クラベス		
17		マラカス		
18		卵マラカス		
19		ギロ		
20		タンブリン		
21		モンキータンブリン		
22		カスタネット		
23		鈴		
24		トライアングル		
25		カバサ		
26		コンガ		
27		ボンゴ		
28		大太鼓		
29		小太鼓(スネアドラム)		
30		トライアングル		
31		ウッドブロック		
32	オルフ楽器	スリッドドラム		
33	ジュタイナー楽器	ライヤー		
34		ハンドドラム		
35	民族楽器	カリンバ		
36		トロンメル		
37		カエルギロ		
38		ワッシャンベ		
39		ジャンベ(ジェンベ)ミニ		
40		ひょうたんカバサ		
41		ひょうたんマラカス		

●わらべうた

とおりゃんせ
おせんべやけたかな
ずいずいずっころばし
おてらのおしょうさん
ちょっばーちょっばー
はないちもんめ
おおさむこさむ
ゆうびんやさん
おおなみこなみ
たけのこ一本
となりのおばさん
なかなかかい
ほたる来い
おおさむこさむ
いちもんめの一助さん
指きりげんまん
らかんさん
いちばんぼしみつけた
あしたてんきになあれ
てるてるぼうず
いたいいたいのとんでいけ
だるまさんがころんだ
はじめのいっぼ
あがりめさがりま
さよならあんころもち
げんこつやまのためき
いっぼんぼしこちょこちょ
だるまさん
ちょちちょちちょちよ
はないちもんめ
おちゃらかおちゃらか
たこたこあがれ
棒が一本あったとき
ちゃちゃつぽ
おちゃおのみに
あぶくたった
おしくらまんじゅう
いもむしごろごろ
ひらいたひらいた
あんたがたどこさ
なべなべそこぬけ
かごめかごめ
上がり目下がり目
どれにしようかな
いちじく人参

ら「わらべうた」のアンサンブルを演習した
楽器と演奏パートを分担し、わらべうたから当日「なべなべそこぬけ」「ひらいたひらいた」「ずいずいずっころばし」をとりあげた。

言葉のリズムをアンサンブルに使うカール・オルフの即興演奏の技法を紹介し、全員で演奏。

「カール・オルフの即興演奏の技法例」…1, 2, 3①②③を順に重ねていく

- 1 拍 う ち…クラベス（教員）指揮役
- 2 旋律パート…木琴・鉄琴・ミュージックベル・ブームワッカー・音積み木で「なべなべそこぬけ」「ひらいたひらいた」「ずいずいずっころばし」の旋律奏
- 3 打楽器パート…言葉をリズムに変え（お菓子、野菜、国、都市など応用できる）それをくり返す
 - ① グループ （チョコレート）ハンドドラム・ギロ → ♪♪♪♪
 - ② グループ （自動車ブービー）コンガ、ボンゴ → ♪♪♪♪
 - ③ グループ （オーストラリア）カバサ、マラカス → ♪♪♪♪
 - ④ グループ 和楽という日本の楽器の音が出せる電子楽器使用（琴の音色）で次の旋律を繰り返す → ♪♪♪♪（ミドシラファミ）

拍打ちの教員が各パートの入りを指示、指揮の下、全員参加でアンサンブルを行う。和楽④から始まり、打楽器パート①②③を順に重ね、旋律を加える、旋律が終わると打楽器パートを順に消していき、最後に和楽で終わる。易しいリズムを言葉に変え、パートを重ねる技法は保育現場でも子どもたちに応用できるため、この日の経験が活かせる体験となった。いろんな楽器を知ることができ、様々な音を経験できた。短時間で全員のアンサンブルは「感動、楽しかった」という感想が最も多かった。学生は音を楽しむ音楽を実感したようであった。

2) 話すこと書くことなど、演習を中心として国語力を高める

この演習では「読む」「書く」「話す」などの言語事項に関する学習を主眼に行った。とりわけ教職関係に進路を決めている学生が多く、学生の希望に添う形で展開した。

① 板書（その目的及び方法）

板書は授業の際に、学習内容を意図的、計画的に黒板に書き、学習指導が効果的に行われる場として不可欠なものである。指導過程の中で、いつ、どの位置に、どのように、どの位の分量で書くかなど、あらかじめ決めておくことが大切で、これを板書計画と呼んでいる。その際に使用する書体は楷書で、丁寧に、字体を見ながら書くようにも指導した。また発達段階に応じて、書く文字や数字の大きさ、書く高さなどにも配慮する必要性を学習した。また以下の5点において

も実践をまじえながら留意させた。

- ・チョークの側面を使って、文字を太く大きく書くこと
- ・文字の全部や一部を籠字で書くこと
- ・色チョークなどを使って視覚効果をあげること
- ・引き出し線や、矢印等を使って文字を書くこと
- ・児童に板書させ、筆順や字形を確かめること

② 文章の書き方

文章というツールを使い、相手に信頼を与え、正確に相手の理解を高め、良い関係を築きながら伝達が行われるように、文章の書き方のルールとコツを学習した。以下の5点に目的を絞って学習した。

- ・「副詞や助詞」や「敬語と表現」の使い方
- ・主語と述語の関係性や句読点の使い方など、読みやすい文章を書く
- ・伝わりやすく、品格のある文章を書くために必要な言葉の選び方
- ・文章に書き手の感情をこめ、相手との距離を近づける言葉の使い方
- ・指導案からブログ記事など、パターンにおける文章の書き方

③ 話す

③-1 発表の準備と確認

学生自身が行った研究、調査を発表するゼミナール形式で展開した。発表内容が聞き手に十分に伝わらなければゼミナールは成り立たない。その点に留意して学習した。

- ・レジュメの中で、読み方の分からない字はないか、あれば辞書を引いて調べておく、地名、人名など曖昧なままにしないこと
- ・読んでみて分かりにくい表現はないか、音読してみること
- ・文の内容が分かりやすく整理されているかどうか
- ・要点は簡潔にまとめられているかどうか、聞き手の身になってまとめ方を検討したかどうか
- ・引用文がある場合、その典拠が明示されているかどうか

以上を考慮しながら学習した。

③-2 発表の実践

- ・話す際の速度は、意識して落としたほうが良い。聞き手にとっては、初めて聞く内容であるため、はっきりした口調で話す
- ・自分の調査や考察に自信を持ち、意図的に正確に伝えるように述べる

- ・レジュメのどの部分を見てほしいかは適宜伝える。図や表に注目してほしい時は十分に時間を取り、丁寧に説明する

以上、言語活動を実践的に展開することによって、相互に批評し合い、理解を深めたりすることができた。

3) 親子関係の支援 ― 保育者と保護者との連携の観点から

① 演習の目的

質の高い実践を行うためには、子どもの姿を把握し、子どもを深く理解し、それに基づいて保育を考え進めていくことが必要であるとともに、子どもの最善の利益を守ることを大前提として、家庭との連携に心がけなければならない。そこで保育者がかかわりにくいと感じる保護者の事例をとりあげた演習を作成し、保護者との信頼関係を構築する保育技術を学ぶことを目的とした。

② 演習の方法

事例に取り組むことによって、学生自らが具体的な保育技術を考え出せるように授業を進めた。子どもと父親が園において一緒に遊んでいる場面の動画（子どもの気持ちかわからずに対応がきくしゃくしてしまう保護者）を見た後、課題として親子場面の書き起こし、親子関係の気づき、遊び終わった「保護者」に対して、子どもの気持ちに敏感に対応できるようになるための具体的な声かけを考える、の3点に取り組み、どのように家庭との連携を進めればよいかを具体的に考える演習とした。保護者との信頼関係を築くための援助の手順として、1：保護者の気持ちを受容する→2：親子の現状把握（アセスメント）→3：支援計画を立てる→4：具体的な声かけ（介入）の枠組みが必要になることを説明し、特に1, 2, 4に注目するよう促した。

③ 結果と考察

表3には、親子関係に関する学生の気づき、すなわち関係のアセスメントをまとめた。保護者

表3 親子関係の難しさ―子ども・保護者のアセスメント

子 ども	保 護 者
保護者に安心して甘えることができない	気持ちになかなか気づけず、食い違う
自発的に遊ばず、なかなか本領を発揮できない	子どもの思うように遊んでいいよという雰囲気を感じられない
はじめは意欲を持って遊んでいるが、避けて「イヤ」という	子どもをうまくリードできず、遊びにまとまりがない。子どもに遊んでもらおうと必死になっていることがわかる
だんだん言葉が少なくなる	子どもの表情や行動を見ない
やりたいことを保護者に言うことができない	子どもが怖がっているときに笑っている
保護者が示したものに興味が移る	どう関わればよいかわからない

は子どもと遊ぼうとしているが、子どもから発せられる（非言語的な）コミュニケーションを受け止めていない、子どもの不快感情にむきあえないなど、保護者の対応が子どもとくい違う点に焦点化することができている。関係の現状を把握し、言語化することができた。

学生が挙げた保育技術として、保護者ががんばっている点を見つけて、努力を認めること、気持ちを受容するような声かけ、親子の交流場面における具体的な子どもの姿や保護者の働きかけをキーワードとして保護者に声をかけ、子どもから発せられるサインに気づけるようにすること、など、関係改善にむけた声かけであった。保育者が保護者を肯定的に受け止めた上で、子どもを共に育てるというスタンスでかかわることで信頼関係を構築し援助になるという学びにつながった。

4) 「保護者の悩みや不安・喜びを知る」

① 授業のねらい

これから保育の現場に出る学生たちにとって、もっとも不安を覚えていることは「保護者への対応」である。家庭支援論や相談支援などの授業において、多様な保護者の事例に触れながら基本的な知識は得ているものの、それらの事例は例えば虐待や強い育児不安などに焦点が当てられ、学生にとっては不安を煽るものでもある。保育者として日常的に保護者と接していくにあたって、現代の日本で子どもを育てる親たちがどのような規範に影響を受けているのかを知ることにもまた重要であろう。本授業では、育児雑誌をとりあげることにより、母親規範や父親規範について理解することを目指して設定した。育児雑誌は、初めて子育てをする母親にとって、育児資源としてのメディア（育児にかかわる情報、知識の提供媒体）として一定の役割を果たすものであるからだ（天童，2013）。

② 授業の内容

授業は講義とグループワークおよび発表の2部構成とした。講義では、現代の母親規範を理解するために、「おしん」の映像を見ながら近代以前の母親規範について解説した。グループワークでは4～5人のグループを作り、教員が用意した育児雑誌の中からそれぞれ1冊を選び、育児の悩みや不安、大変さについて書かれた記事、育児の楽しさや喜びについて書かれた記事、メインの特集記事など教員が指定したテーマについて話し合ったことを模造紙に記入した。全員が記入を終えた段階で、各グループにはまとめた内容をもとに「子育ての悩みや不安・喜び」について発表をもらった。

選定した雑誌は表4の通りである。

表4 分析に使用した雑誌一覧

雑誌名	出版社	出版時期
tocotoco	第一プロGRESS	2015年秋号
Baby-mo	主婦の友社	2015年9月号
ひよこクラブ	ベネッセコーポレーション	2015年9月号
mama-girl	エムオンエンターテイメント	2015年秋号
SAKURA	小学館	2015年9月号

③ 成果と課題

授業の最後に提出した小レポートでは、「保護者の方と接することにとっても不安があったが、リアルな子育ての悩みや楽しさを知ることができて楽しみになった」「育児をしながらも、1人の女性でいなければならないというプレッシャーは大きいことがわかった」などの感想がみられた。保育者として保護者とパートナーシップを醸成し、共に子どもを育てていくという信頼関係を築くことが重要であること、そのためには目の前にいる保護者の置かれた環境や心理的状态に想像力を働かせることが必要だと学んだのではないだろうか。働く母親を対象とした雑誌を入手できず、主として働いていない専業主母が対象となったため、雑誌以外の媒体についても取り上げることが今後の課題である。

5) 『保育内容（表現・造形）』で学んだこと

① 本実践の概要

「保育内容（表現・造形）」は、1年次に前期後期合わせて30回の授業を行っている。色彩やデザインの基礎的演習や水彩絵の具を使った描画活動、グループ制作による校内装飾や保育の現場で使える模擬授業などが主なものである。今回はそれらの授業の意義に触れた後、昨年の授業では取り上げなかった技法遊びを扱った。また、後半では、その技法を使った授業案を考え見本作品を制作した。

② 授業内容

『2・3・4・5歳児の技法あそび実践ライブ（ひかりのくに）』で取り上げられている「水性フェルトペンのにじみ絵」を行った。手順は、和紙にフェルトペンで点を打っていき、霧吹きで水をかけるといふ具合だ（図1）。その後制作した見本作品は、スケッチブックに打った点をにじませて上からクレヨンを塗ったもの（図2～4）、和紙に絵を描いてにじませたもの（図5、6）、和紙でにじませたものを切ってスケッチブックに貼ったもの（図7～10）などがあつた。手順的に

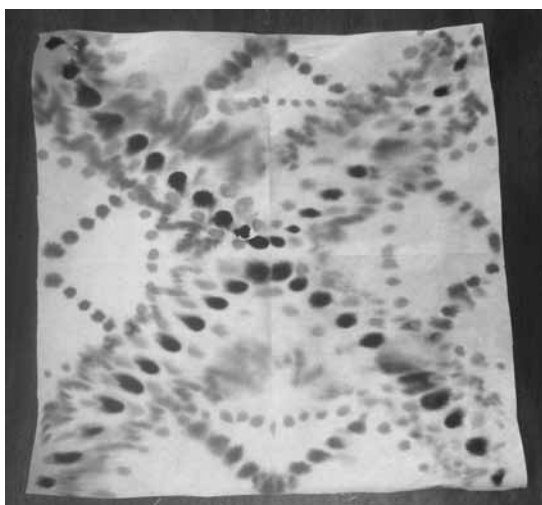


図 1

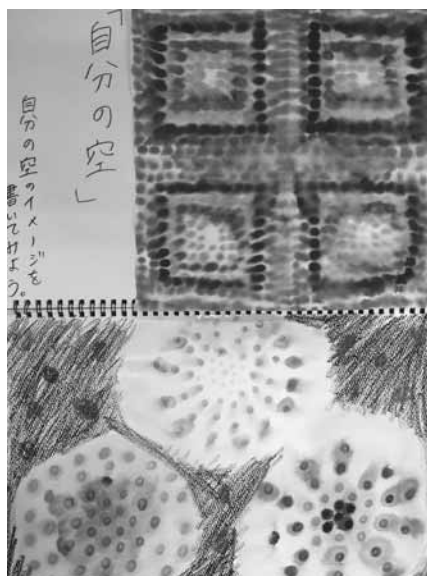


図 2

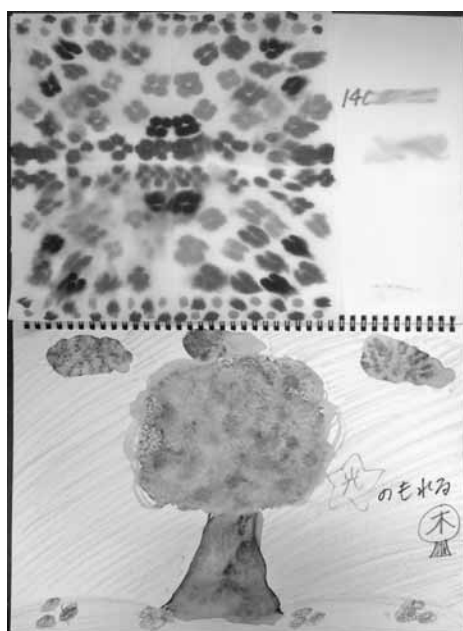


図 3

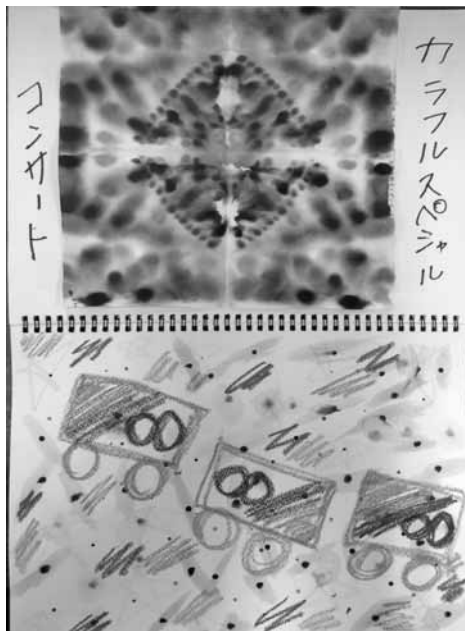


図 4

は小さな違いではあるが、表現されたものは大きな違いになっていたと思われる。絵の具を使わずに、ここまで色彩鮮やかな作品ができた事で、学生達には好評だった。



図 5



図 6



図 7



図 8

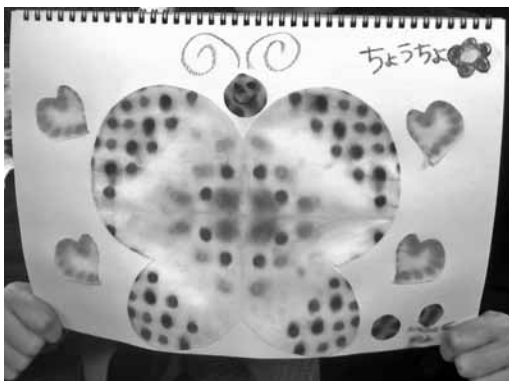


図 9

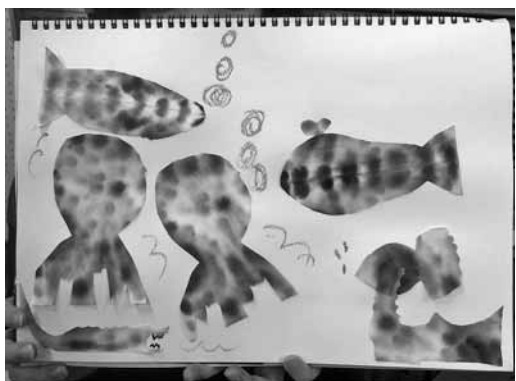


図 10

6) 保育者・教師のキャリア形成

① 授業概要と展開

①-1 授業目標

得意を活かして保育すること、苦手を伸ばして保育することを自己の課題として捉える。

①-2 授業概要

保育の場は早期離職の傾向が強く、その要因として保育の多様化・複雑化が挙げられる。保育という仕事に対するやり甲斐を得るには困難も多々ある現状において、得意を活かして保育をすることを具体的にイメージすることをねらいとして、本講義の担当者が新人幼稚園教諭として3歳児クラスを担当した際の実践記録や『新人保育者物語さくら』を取り上げ検討する（図11）。



図11 新人保育者物語さくらの一場面

② 展 開

- a 『新人保育者物語さくら』⁽¹⁾の主人公さくらの姿から感じること
- b 実習を振り返り、自分の「得意」「苦手」を挙げる
- c 仲間が認める「あなた」の長所
- d 得意を活かし苦手を伸ばすために、卒業までにすべきこと
- e 実践記録「怒鳴るから響くへ」の新人保育者の姿を通して考えよう！

③ 成果と今後の課題（学生の感想をもとに担当者が自己評価）

③-1 成 果

上記のdにおいては、クラスを3グループに分け保育者としての「強み」につながる一人ひとりの長所を挙げた。eへの展開により、「強み」を生かし「弱み」を伸ばす動機づけはできたと考える。eの実践記録「怒鳴るから響くへ」⁽²⁾は、保育者の力んだ伴奏が原因で常態化した怒鳴り歌を解消するために「ピアノの赤ちゃん（鍵盤ハーモニカ）」を用い、響く歌声に変容させ

るまでの保育過程である。実体験に触れ、保育者になる心構えや「強み」「弱み」と向き合い保育する姿をイメージできたと考える。就職先を決め兼ねていた学生が、授業終了後に「幼稚園の先生になる」意思を固めた。子どもの魅力を共感し、保育への意欲を高められたことが何よりの成果であった。

③-2 今後の課題

展開の a において「得意が無い」ことにコンプレックスを感じる主人公の姿に、保育者と実習生である自分の力の差を目の当たりにした衝撃が重なり合い、記述しながら涙ぐむ学生もいた。成功体験を評価するだけでなく自信喪失の体験を次への活力にする援助的指導の必要性を改めて感じた。

展開の b や c において、「得意」より「苦手」を先に書く、多く挙げる学生の姿が目立った。保育者の卵としての自己肯定感を高め現場に送り出すことが必要であると感じた。

④ 受講した学生に期待すること

苦手なことから逃げずに努力できる「私」が寄り添っていること、それが「子どもたちの幸せ」と思える心の強さと謙虚に得意を活かす心もちをもってキャリア形成してほしい。

7) 特別なニーズを持つ子どもと保護者への保育 ― その視点の整理

① 目的の設定

近年の保育、教育の現場においては、“気になる”子どもたちや保護者に対する配慮ある関わりの重要性が求められている。受講生は、これまでに、障害児保育等の講義を通して障害の基本的な特性や障害児を持つ保護者の概要については学んでいる。しかし、そうした基礎知識を実際の子どもたちの言動と結びつけることや保護者を目の前にしたときに具体的に言葉をかけることは、容易ではない。そこで、本講義は、これまでの学びを現場実践へと繋げる一助となることを目的とした。

② 授業内容の設定と準備

本授業では現場で必要となる3つの視点（表5）を取り上げ、事例を用いた個人およびグループワークを実施した。授業に先立ち、自閉スペクトラム症（以下、ASD）を疑われた年長男児の架空事例を作成した。事例では、幼児期のASD児が示しやすい行動特徴を複数記述し、保育者の対応を描いた。また、保護者が園に不信感を抱く内容とした。次に、着目点を明

表5 現場で必要となる3つの視点

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">・特徴的な行動への気づきと障害と関連させた理解・障害特性に配慮して関わるという原則の理解・保護者と相対する時の基本的な態度の理解 |
|--|

表6 ワークシートに回答を記入する問いの内容（A～D）

『事例の経過』	
A	子どもの気になる行動，特徴的と思われる行動を抜き出す。
『現在の子どもの様子』	
B	保育者が誤解しがちな子どもの言動の例に対して，障害特徴を理解した上で適切な対応を考える。
C	保育所児童保育要録の記入練習
『保護者面接の場面』	
D	園に対して不満を持った母との面接，最初の言葉かけを作る。

確にし，考えを整理できるようワークシートを作成した。事例は、『事例の経過』『現在の子どもの様子』『保護者面接の場面』の3部構成とし，それぞれに問いを設け，回答をワークシートへ記入する形式とした（表6）。

③ 授業の展開

指名された学生が順に事例を読んだ。その後，AからDの問い毎にワークシートを記入し，数名の学生に発表を促した。Aでは，適切な言動が回答された。Bでも比較的適切な関わりが回答された。一方，Cのように情報を要約して記述することや，目的に沿った内容の記述は，ほとんどの学生が困難を示したため，数名ごとに助言を行いながら回答を支援した。問Dに対しては，適切な回答を作成する学生と，ほとんど書けない学生とに分かれたため，適切な回答を模範解答として示すと共に個別的に支援した。

④ 学生の様子と所感

授業の理解度や参加態度は，学生によって差があるようだったが，個別に回答を求めていくと熱心に考え，回答が不十分と分かると何度も修正する様子がみられた。また，質問内容を噛み砕いて説明することで理解に達し，授業への参加状況が改善する学生が複数見受けられた。授業後の感想からは，現場を想像したコメントや理解が促進されたといった回答が複数みられた。総括したものとしては，次のようなものがあった。「ASDのことについて授業を聞いて，今まではASDについてよく分かっていなかった部分もありました。今回，自分たちでどのような対処をするのかなどの話し合いをして今までよりは理解できるようになりました。実際にそのような場面に出くわした時に今日勉強したような言葉掛けができるか分かりませんが，周りの先生たちと相談しながら対応できるようにしていきたいです」。ワークシートへの回答内容と，その後の授業担当者とのやりとり，コメントにみられる障害理解の促進や，現場を想像した内容から，本授業が現場へ繋げる一助となったのではないと思われる。

4. ま と め

本学の保育・教職実践演習では、担当教員の専門性を活かした個別授業を特長とし、学生の実践力を高めることを企図してきた。音楽や造形など表現にかかわる授業では実技や演習を通して、その他2年間の授業や実習では知識や経験が至らない領域、例えば親子関係への支援や、保護者支援、キャリア形成といったテーマについては事例研究など、より「実践」を重視した方法により、学習成果を達成することができたのではないだろうか。また、いずれの授業においても教員が学生からのフィードバックを得ることにより、次年度以降の授業改善に役立てられている。

今後の課題としては、次の2点があげられる。第一に、それぞれの個別授業を有機的に関連させ、学生の体系的な学びにつなげていくことである。第二に、本学のカリキュラムポリシーおよびディプロマポリシーとの整合性を図り、学習成果の達成を学生と教員の双方が共有することであると考える。

《注》

- (1) 『新人保育者物語さくら』村上かつら作(2011)小学館
- (2) 日本児童教育振興財団主催、小学館後援『第42回私の保育記録』に入選(2007)、青木(2013)

文 献

- 青木秀雄編著, 2013, 『教職実践演習 ― 磨きあい高めあう熱意ある教師に ―』明星大学出版部: 123-131.
- 平尾憲嗣他, 2015, 「教職実践演習(幼稚園)」における意識調査の分析: 発表形式の違いによる保育実践に関する学生の意識の推移」岡崎女子大学・岡崎女子短期大学研究紀要 48: 27-34.
- 一色玲子他, 2014, 「短期大学部における『保育・教育実践演習(幼稚園)』の成果と課題: 学生の自己評価の結果にもとづいて」『聖カタリナ大学・聖カタリナ大学短期大学部研究紀要』26: 79-97.
- 勝間田明子, 2015, 「教職実践演習に関する一考察 ― 子育て支援室の環境構成に対する気づきに着目して」『鈴鹿短期大学紀要』35: 75-84.
- 三好優美子・佐藤喜代・久芳美恵子, 2015, 「教科『教職実践演習(幼稚園)』の教授法に関する一考察」『東京女子体育大学・東京女子体育短期大学紀要』50: 77-138.
- 文部科学省, 2009, 『今後の教員養成・免許制度のあり方について(答申)』.
- 天童睦子, 2013, 「育児戦略と見えない統制 ― 育児メディアの変遷から」『家族社会学研究』25: 21-29.
- 山田悠莉他, 2014, 「『教職実践演習(幼稚園)』の授業内容に関する研究 ― 付属幼稚園の観察記録から見えるもの」清光学園岡崎女子短期大学学術教育総合研究所『学術教育総合研究所所報』7: 45-53.
- _____, 2016, 「教職実践演習(幼稚園)」における協同学習の効果 ― 集団での学びに焦点を当てて」『岡崎女子大学・岡崎女子短期大学研究紀要』49: 81-87.

(提出日 2016年10月26日)